

柔道 日本とブラジル

浅賀 健一

はじめに

小学校4年生の時、従兄について町道場へ行ったのが、柔道との出会いである。中学、高校、大学と稽古を続け、卒業後も新日鐵八幡で柔道部に入った。大学入試の当日も高校の道場で稽古をするほど、柔道にのめり込んでいた。38歳で出場した東日本実業団大会では、神永先生が主審をされ、技あり優勢勝ちをなんとか拾って引退。その後は、大学のコーチや新日鐵本社 of 柔道部長を務めた。

ブラジル駐在は2回経験しているが、1977年から83年の間は、サンパウロ市内の石井先生の道場や、USIMINAS社のUSIPAクラブでむきになって汗を流したのが懐かしい。二度目の2000年から07年末までは、リオ市イパネマのMehdi先生の道場や、ブラジルナショナルチームの寝技の指導、サンパウロ大学医学部の“SENSEI”を拝命した。

退職後は、全柔連の少年柔道普及・振興活動や、母校開成学園の柔道部師範として子供達と向き合っている。今回、執筆の機会を戴いたことから、ブラジルを中心としたラテンアメリカの柔道と日本との関係について、若干の感想を述べたい。

柔道の国際化の歴史

柔道は16世紀ごろの鎧組討ちの武芸に源を発すると言われている。その後江戸時代になって諸流派が勃興し、武士のみならず岡っ引きなども逮捕術として学んだことが資料に見られる。明治に入り、嘉納師範が自ら学ばれた天神真楊流柔術や起倒流柔術の理論や技術を基本に、崩しの考え方等を加えて体系化し、講道館柔道を確立された。時に師範は22歳、教育者を目指す若者であった。いささか脱線するが、嘉納師範の誕生は万延元年、西暦1860年であるが、内村鑑三1861年、新渡戸稲造、森鷗外が1862年、翌63年に岡倉天心が生まれている。和魂漢才の教育を基礎に洋才を兼ね備えた偉大な先人が相次いで輩出されたのは、当時の欧米列強によるアジアの蚕食と無関係ではあり得ない。

日露戦争は明治38年に終結し、翌年米国の仲介でポーツマス条約が成立。そんな時代背景のなか、嘉納師範は明治36年に先ず高弟の山下義韶を米国に派遣、

翌37年富田常次郎、前田光世を米国に送った。柔道が世界に普及してゆく流れには、大きく二つの系統があるように思われる。一つはモンゴル相撲に代表されるシルクロード地域に昔から分布する格闘技の伝統。北トルコ、ジョージアに残るチダオバ、中東からトルコに至るレスリング系の格闘技。この流れはスイスのチロル地方にまで及んでいる。古来からあった格闘技の文化が柔道の普及に大いに役立ったと言える。帯を締め、畳の上で技を競い合うという、東洋的な様式とも相俟って欧州に広まっていった。

一方、米国に渡った上述の前田氏は単身欧州に渡り、さらに中・南米等をボクサーやレスラー相手に柔道の声価を高め、終の棲家をブラジルのベレン市に構えた。彼はその後半生を、日本からやってくる移民の救済事業に捧げたと言われる。今や日本にも逆上陸しているブラジリアン柔術、その開祖とも言われる故エリオ・グレイシー氏のお宅を訪問した際に、彼の長兄が前田氏から手ほどきを受けている様子を道場の隅で見ているという話を伺ったことがある。彼がプロレスに身を投じる前の木村正彦とマラカナンサッカー場で、当時の大統領臨席のもと、試合をしたことはブラジルでも有名な話だ。木村氏の関節技 腕がらみを受けたが、参ったをしなかったもので、肘関節が砕けたと当時の新聞は報じている。参ったをしなかったエリオに対して、木村氏が敬意を払ってくれたと、喜んでいた彼の表情は今でもよく憶えている。

一つ疑問があるのは、なぜ前田氏は柔道と名乗らず、柔術と称していたのだろうか？ 自分の勝手な推測では、柔道の伝道師として欧米からラテンアメリカを回って、まさに柔道の声望を高める活動が続けてきたわけだが、嘉納師範が禁じていた賭け試合や他流試合をしながら糊口をしのぎ流浪せざるを得なかった事情があるのではないと思われる。また、フリーライター宮澤正行氏の文献によれば、笠戸丸以前に竹沢万次という人が、欧州からの興行一座に加わって、柔道技を見せていた史実があるとのことである。

ブラジルの柔道

ブラジルへの柔道の伝播という意味では、竹沢万次

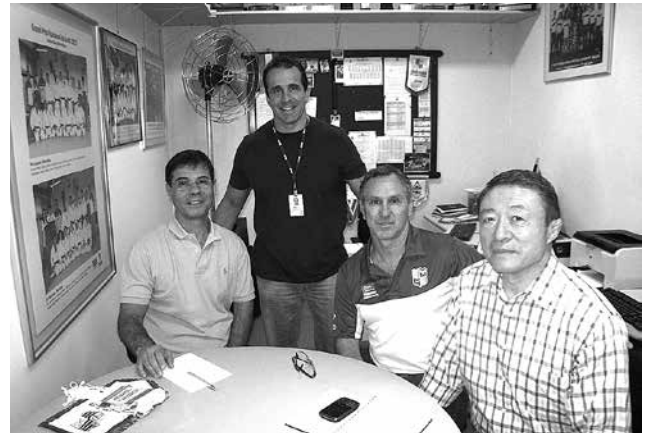
や前田光世の活動があるが、大きな流れという視点では、日本からの移民が自らの子弟やコロニアの青少年の教育のためにもち込んだ伝統がある。柔道は今や、サンパウロやリオ、ベロオリゾンテのような大都市だけではなく地方からも優秀な選手が育つ基盤がある。ブラジルにおいて柔道が脚光を浴びる契機になったのは、何と言ってもミュンヘンオリンピック（1972年）で石井千秋氏が銅メダルを獲得したことであろう。ブラジル人もやればオリンピックでメダルが取れるという事実が大きなインパクトを与えた。このミュンヘンでブラジルが獲得したメダルは、石井千秋の銅メダルと、三段跳びのネルソン・プルデンシオの銅メダルの2個であった。

石井氏は栃木県足利市の出身で、早稲田大学卒業後、直ちに移民船「あめりか丸」に乗り、世界に雄飛するとの志を抱いてブラジルに渡った。その石井氏と岡野脩平氏（中央大学卒、大谷重工に入社、東京オリンピックの候補選手）との出会いが、ブラジルに柔道初のメダルをもたらした。

現在、日本の全柔連登録人口は20万人を切る状況にあるが、ブラジルでは競技人口が100万人とも150万人以上とも言われるまでに普及している。馬術やヨット、バレー、ビーチバレーと並んで、リオオリンピックではメダルにもっとも近い種目の一つになっている。2012年のロンドンでは、男女それぞれ2名、計4個のメダルを獲得しており、日本の男子4個、女子3個と比べても、日本を脅かす第二グループに入っている。その他、実績があるキューバやコロンビア、アルゼンチンからもメダリストが生まれており、今後一層の競技力向上が期待されている。筆者の友人チアゴ・カミロ選手は、サンパウロ州の内陸バストス市の生まれで、18歳にしてシドニーオリンピック（2000年）で銀メダルに輝き、07年にブラジルで開催された世界選手権では世界チャンピオンに、北京オリンピック（08年）では銅メダルを獲得した。彼は地方出身で大輪の花を咲かせた代表的な選手の一人である。

女子についても、先天的な身体能力の高さと、勝負の本番に強い選手を生み出す風土がある。石井先生の長女のターニアさんを一時期指導したことがあるが、親譲りのDNAもあって、パンアメリカン大会ではチャンピオンになり、ブラジル代表としてバルセロナオリンピックにも出場している。米国代表としてエッセンの世界選手権で優勝（日本の古賀稔彦に勝ってリベンジした）したマーク・スウェイン氏の夫人がそのタ

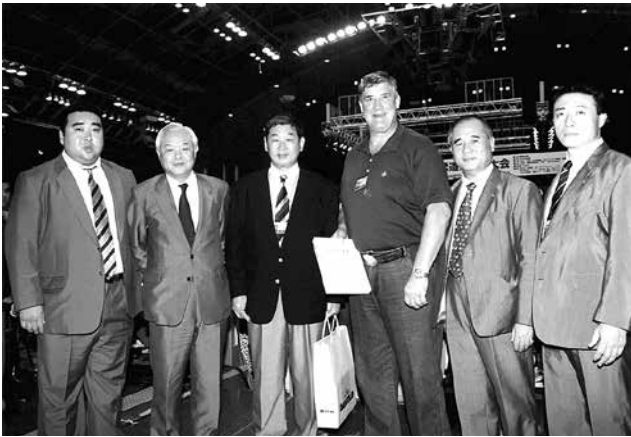
ーニアさんだ。なにはともあれ、日本人以上に恵まれた肉体をもっているので、練習環境や技術的な研究心が備われば、さらに強力なライバルになることは間違いない。



ミナステニスクラブにてナショナルチームの合宿
2013年、左端はブラジル柔道連盟副会長ネイ氏、右端は筆者

ウジミナス製鉄と柔道

同社のイパチング製鉄所の建設当時、八幡製鉄（現在の新日鐵住金）から派遣された阿南惟正氏と田尻慶一氏が中心となって設営された、おが屑の上にマットを敷いた道場がウジミナス柔道の出発点だ。後年、新日鐵とウジミナスはスポーツ交流を開始。柔道については、初代の須磨周司氏から数えて7人の指導者を派遣し、ミナスジェライス州やブラジル柔道の発展の礎となった。当時の永野会長と武田社長の命を受けて、新日鐵柔道部監督の神永昭夫氏（1964年、東京オリンピックでオランダのヘーシンクとの決勝で敗れた）がブラジルを視察。現地の熱い取り組み姿勢に触れ、ブラジル柔道の将来の発展のためには一流の指導者を出すべしとの大英断が下された。須磨氏は筆者と同期入社で、1969年の世界選手権重量級の金メダリスト。彼がイパチングに赴任した当時は、ブラジルのナショナルチームの強化合宿がイパチングの道場で行われたことがあると伺っている。記憶がいささかあやしいが、私が駐在していた時期にも、ホジェリオ選手と女子選手1名が、イパチングの道場からオリンピック代表になっている。柔道以外にもサッカーや水泳の指導者の交換があり、黒佐年明氏（背泳の世界記録保持者田中聡子を育てた）が基礎を築いたイパチング水泳部からも、ブラジルを代表する選手が生まれている。イパチングのウジッパクラブ道場は、最盛期には1,000人を超える練習生を擁していたが、現在は100人余りの児童を対象に指導が継続されている。



東京オリンピックの覇者ヘーシンク氏と1995年、千葉で開催された世界選手権の会場にて(左端から2人目 阿南惟正(元新日鐵)、4人目 アントン・ヘーシンク、5人目 田尻慶一(元新日鐵)の各氏。右端は筆者)

パラリンピック

ブラジルは柔道の先進国であると同時に、障害者スポーツを支援する社会的風土があり、パラリンピックでも活躍する選手を送り出している。2001年リオで開催された視覚障害者の世界柔道選手権で、筆者は貴重な体験をした。日本視覚障害者柔道連盟が日本からの選手派遣を断念するなか、静岡県出身の稲葉統也(もとなり)氏が個人の資格で大会に参加された。筆者は、リオデジャネイロ州日伯文化体育連盟のサポートのもと代理監督を務めた。試合前の準備運動で、彼の打ち込み稽古の相手をしながら、一回戦で当たるアルゼンチンの選手が、右組の背負い投げの練習している様子を彼に話した。相手選手の特徴や右組みか左組みかの組手の情報等を事前に伝える支援を必要とするが、一旦試合が始まれば、健常者が足元にも及ばない繊細な神経、聴覚、嗅覚、記憶力等を総動員して闘う、限界で勝負している人間の姿に心を打たれた。試合の翌日、稲葉さんは、世界的に有名なポンジアスカル(砂糖パンの山)を観たいと、私のフラメンゴのアパートを訪ねてきた。眺望を堪能した後、壁伝いに約400平方メートルの室内をぐるっと回った。「稲葉さん、ここが入り口ですよ」と言うと、彼が先ほど脱いだ靴をすばっと履いた。視覚障害をもつ選手は、一般の健常者が気付かなくなっていることや、退化させてしまった生まれ持った能力を、限界まで訓練して競技に取り組んでいることを実感した。稲葉氏との出会いで、健常者が当たり前に見えているからこそ見えなくなっているもの、普通に聞こえていることできちんと聴き分けられなくなっていることが沢山あることに気付かされた。空港での別れ際、彼は「目が見えなくなってから、良く見えるようになりました」と名言を残して帰国の途につ

いた。是非、リオのオリンピックではパラリンピックにも注目して欲しいと思い、筆者の経験を紹介させて戴いた。

ブラジルを中心としたラテンアメリカに期待

競技力という観点では、格闘技に適した体力や気質の面で日本人に優るとも劣らない潜在能力があり、良い指導者と練習環境に恵まれた選手は、国際的にもトップクラスの成績を収めている。特にブラジルでは、柔道の教育的な側面も注目され、地域での青少年教育のプログラムに採用されているケースが見られる。

日本は柔道発祥の国だが、国際柔道連盟における立ち位置が低くなっている現実を認めざるを得ない。スポーツ全般が、商業化の色彩を強め、視聴率の取れるイベント運営に傾斜しているが、柔道も例外ではない。

このような背景認識のもと、国際柔道連盟の動向には目を配りながらも、嘉納師範の三育(知育・体育・徳育)の精神を守り、本来の柔道の譲れない部分をどう守り抜くのか、競技力のみならず、国際柔道連盟における政治力をも日本の柔道界には求められている。欧州とは異なり、日本の文化や伝統に深い理解をもつブラジルを中心とするラテンアメリカ各国の柔道連盟と連携を強め、正しい柔道の理解者を増やし、本来あるべき柔道の普及・発展を支えるためにも、リオのオリンピックとパラリンピックでの日本とラテンアメリカ諸国の選手の活躍に期待したい。

(あさか けんいち 元新日本製鐵顧問)